

第 19 回自然史標本データ整備事業による標本情報の発信に関する研究会要旨

鳥類における観察データの活用とその問題点

山崎剛史(公益財団法人山階鳥類研究所自然誌研究室)

日本には、鳥類標本の蓄積があまり見られない。国内最大の山階鳥類研究所コレクションですら、その所蔵数は7万点ほどである。一方、鳥類は観察データの収集が古くからさかんに実施されており、国内の蓄積量は数百万件以上に達している。これらのデータの多くは種名・性別・観察地点・観察日時等の情報を伴っているため、国際共有化が実現されれば、生物多様性研究の進展に貢献するところが大きいと期待される。今回の発表では、山階鳥類研究所が管理している 500 万件超の鳥類標識調査データを主な例として、観察データの共有化を実現する際の諸問題について考察を加えた。同定に対する疑義が生じた際の担保がないという問題をどのように緩和するべきか、その方法の模索が主要な課題だと考えられた。